

優秀賞

テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「よしくん」

兵庫県・啓明学院高等学校2年 高橋 すす

私の家から歩いて一分、走って三十秒のところによしくんの家はある。よしくんとは小学校のときの同級生で、よしあき、という名前からよしくん。くりくりした目と、いたずらっ子のような笑顔。小学校のときには高めの声だったけれど、今ではもう声も低くなった。

よしくんは自閉症だ。辞書で調べてみると、『早期幼児期に発生する精神発達障害。対人関係における孤立、語学発達の異常、特定の状態や物への固着などを示す』とあった。医学的なことは全く分からないけれど、よしくんは違うのに、と思う。少なくとも、よしくんは対人関係における孤立はしていない。

よしくんはいつもクラスの中心にいた。「つくってあそぼ」が大好きで、作った作品をみんなにプレゼントしてくれたり、ドラえもののCDを聴かせてくれたり。「よしくんすごいねえ」と褒められると、いつもはにかんだように笑った。

私にとつてよしくんは、近所の友達であり旧友。今でも会うとおしゃべりしながら一緒に帰ったりする。よしくんのお母さんに「すずちゃんといるとよく喋るのよ」と言われたときはとても嬉しかった。

私の中に、よしくんは障害を持っているから優しく接しようだとか、そんな気持ちにはさらさらしない。よしくと過ごす時間が長くなればなるほど、障害というフィルターが気にならなくなってどうでもよくなる。そんなフィルターを通して人を見ている時点でそれは偏見だ。「障害のある人に親切にしましょう」なんてものはただのエゴだと思う。

よしくんは、デイズニーのロゴを手書きで完全にコピーすることが出来る。それを「自閉症の子って一部の能力がずば抜けて優れてるって言うもんね」と物知り顔で言う人もいるが、どうして障害とくっ

けて考えるのだろうか。障害があるからこうだとか、この人は障害者だからこう接さなくてはいけないだとか、そんな考え方はおかしいし、間違っていると思う。

「よしくんとも仲良くしてあげて偉いね。優しいね。」

と言われたことがある。私がよしくんの話をしていたときだ。私はその言葉を聞いたときこの人が何を言っているのか理解できなかった。よしくと仲の良いことがどうして「偉く」「優しい」のだろうか。どうして仲良くして「あげる」なんて言うのか。褒めてくれようとしたのだと今では分かるが、あの言葉はとてもショックだった。

中学に入り、新しい友達と出会うと、中には、自分のまわりには知的障害を持っている人がおらず、どう接して良いのか分からない、という友達があった。私は別に気を張る必要はないと思う。普通で良いのだ。「障害者だから」という理由で行動する必要は無いし、大切なことは、「自分が余裕のあるとき、困っている人に親切にする」ということだと思ふ。誰に対しても気遣いが出来ることこそが大切であつて、自分の知っている人だけに対してでも、障害者にだけ優しくても、それは自己満足になりかねないし、その「人を区別する心」が差別などに繋がっていくのだと思う。障害者を理解しようとするのではなく、その人自身を理解しようとする心が世界中に広がれば、誰にでも住みやすい社会が出来る。理想論にすぎなくても私はそれを目指して生きていきたい。